

パネリスト（佐田尾信作 氏）

佐田尾でございます。大崎上島の皆様にはいつもご愛読ありがとうございます。先ほど木江中学の權伝馬のときの踊り、とてもかっこいい踊りだと思いました。ああいう踊りだったら、今の中学生でもどんどん参加してくれるのではないかと思います。エンディングのところで“コブクロ”の曲が選曲されて流れていたのも、もうちょっと聞きたいなと思ったくらいです。

ちょうど私が山口県の大島に仕事で居りましたときは合併協議のさなかでした。このときに当地、大崎上島も協議のさなかだったと思います。そういうことでいくつかの点で、私はこの島にかねて親近感といいますか、関心を持ってきました。一つは大島もこの島もそうなのですが、一島一町。一島で一自治体となる道を選んだ。経過はいろいろあると思いますけれども、私も大島でそういう論陣を張った手前、いろいろこの島についてもこのように道を選ばれたことに一つの敬意を表しております。それから、先ほど町長にお会いしてあらためてお話をお伺いしましたが、広島県ではただ一つ残った全部離島。ことばは難しいのですが、離島振興法の上で、一つの自治体が完全な離島であるところはもうここだけであるということだと思えます。近隣には愛媛県弓削島などの上島町があると思えますけれども、そういう意味でも、あるいは苦難の道といえるかもわかりませんが、独自の道でもある。そこにまた未来もあるかもしれないと思えます。

それから大島とはこの島とも国立商船高専があるという共通点があると思えます。今日も船の話が出て中心になると思えますが、船乗りを育ててきた島であるということがあると思えます。これはずいぶん古い話になりますが、かつては中国新聞に木江支局があったのだそうです。私が入社したときにはすでに竹原支局長兼木江支局長という実質的にはなかったのですが、それだけの独自性をもった土地であったということをお話したいと思います。

さて、私の場合は離島ということテーマにしなが、気楽に映像を見ていただきながらお話をしたいと思います。

（スライドを映しながら）

ご紹介にありましたように、宮本常一という人を追いかけてきました。生前私はあい見えていませんので、宮本と接点のあった人のことばから、宮本先生の旅とか、何をたどってきたかをずっと取材してまいりました。この人が宮本常一ですが、最近になって三原で再確認されました資料の中にある宮本常一です。三原から列車で帰路につく姿です。これが宮本常一の遺品なのですから、カメラとかこういったものの中に「万葉集」と「古事記」の文庫本が収まっていた。これは何を意味するのかといいますが、結論からお話しすると海は何をつないできたのかということなのですから、宮本常一の時間の構想、最晩年の構想に「海からみた日本」というテーマがありました。これは長きにわたる宮本の旅と調査、そういったものの一つの結論だったのではないかと思います。

昭和16年に瀬戸内海の東部をめぐる旅から始まりまして、戦後は水産庁の委託の漁業

制度資料調査ということでこの大崎上島を含めた瀬戸内海の漁村文書を調査しております。それからその後、対馬とか壱岐、五島列島それから佐渡、そういったところの調査をし、やがて瀬戸内海自体を学位論文としてまとめる。それから晩年には韓国の済州島でこれは鳥羽とも関係があると思いますが、海女の系譜の調査をする。それで80年に構想が固まって執筆の準備をし始めるのですが、翌年亡くなります。現在は若干の講演録とか遺稿が残っておりまして、それが日本文化の形成ということでもとまっておりますが、これは未完のテーマだったと思います。そういうところからみますと、瀬戸内海の島をもう一度潮流の流れから見るといいますか、もっと私たちが今思うような感覚ではない別の感覚で、もっと想像力を働かせて海を見てみる。そういうことにつなげたいというのが結論となります。その時の状況でこれは日本文化の解説にもありますが、「古事記など数冊を抱えて入院した」この入院が最後になったわけです。それから瀬戸内海と縁の深い歴史学者の網野義彦の解説にも「島を離島ととらえていた1960年代の宮本氏の見方とは基本的に異なっている。晩年の宮本氏の学問の進化をうかがうことができよう」このように網野さんは書き残しています。それからあとは離島を、大島は完全な離島ではありませんが、こういった映像を見て最後に大崎上島の映像も見ていただいて、ざっとしたイメージを作っていただこうと思います。

これが宮本常一の故郷の大島です。右側が大島側でこれが大島大橋です。

次にこれは山口県天然記念物のアコウという群落で、つまりここが亜熱帯植物の北限なのです。その大水無瀬島という島が属島のひとつで無人島ですがその向こうが四国です。

(次)

情の瀬戸ですね。このような急な瀬戸の島にも人々が住み着くという。それは好漁場であることで住み着くわけです。フェリーは防予汽船です。宮本常一は風光明媚な土地ほど暮らしている人の苦労は大変なものだということばを残しているのですけれども、2004年の秋の台風の後で、ここは実は舗装道路なのですが、海の砂が一夜のうちに道路に上ってこんなふうになっています。伊予灘側の外入という集落で、翌朝撮った写真です。

(次)

それからこれが宮本の生家の対岸の真宮島ということころです。

(次)

「森にあたる音、それが私の气象台である」ということばを残しておりますけれどもこの森が下田八幡宮の森。これも故郷の風景ということになります。

(次)

同じ八幡宮です。

(次)

これがご参考までに周防大島文化交流センターという、宮本資料室です。

(次)

その内部の書庫です。25000冊の蔵書があります。

(次)

これが遺品のカメラです。一台がオリンパスペン・ハーフです。現在はショーケースの中に収められています。このように七、八台のカメラを使って十万枚の写真を残していると言われていました。

(次)

これは久賀という集落です。

(次)

このようにスイドウといいまして、棚田の暗渠なのですが、この島の久賀というところの独特のものです。こういった石工の独特の棚田から派生した技術がありました。こうした技術が出稼ぎによって瀬戸内海一円に広がりました。

(次)

沖家室島です。

(次)

これは鯛の一本釣り漁の島です。西は対馬、これは森本さんの調査にもくわしいのですが、遠くは五島それから備讃瀬戸、下関までかつては出漁した島です。最終的にはハワイまで行き着くというそういったつながった島でした。

(次)

釣り針を作っているのは老漁師です。

(次)

在外島民。これは台湾の高雄から寄進を受けた石造物なのですが、そういう在外島民からの寄進で成立っている神社です。

(次)

これは沖家室あるいは久賀の漁師が停留した村か。長崎県の対馬にあるというので行って見たのですが、そういう土地です。

(次)

この島は全戸が一か寺の檀家という島です。

(次)

それからこの島は現在無人島なのですが、忽那諸島の由利島というところですか。かつてはこのように40組くらいの、宮本常一が訪ねたころにはイワシ漁の仮集落ができていた、そういう島で今は無人島です。

(次)

このように漁具とか暮らしの道具がまだ残っています。昭和40年代まで人が住んでいた島です。このように瀬戸内海の島というのはいろんな移り変わりが激しいという、そういうこともあるかと思えます。

(次)

海底ケーブルも残っています。

(次)

現在はこのように取材艇からボートで渡りました。

(次)

ここは佐合島といいまして、山口県の柳井のちょっと東側の平生町なのですが、そういう島にも宮本が訪ねて行っています。

(次)

かつて大きな回船主であり塩田主、地主でもあった佐川家の屋敷跡です。この蔵の中の文書を宮本常一も見たであろうと思われます。

(次)

先ほどの当主の佐川さんが言われたことばが印象に残ったのでちょっと引用しました。「船ならばこそですね。尼崎あたりまで風に乗れば一週間で往復しました。」機帆船だと思えますけれども、この家には金比羅山のお札とか多数残っていました。見延さんも言われましたけれども、まさに船と海の世界だったと思います。

ここには宮本常一の文書の借用書とか詫び状とかが残っております。

(次)

映像はこの辺りまでなのですが、今日、当地の大崎上島で1988年に森本さんも編集長をされていた観文研の「あるくみるきく」で槇皮（マキハダ）船がこのように取り上げられています。この船は「信用丸」という船だそうです。

(次)

ちょっといい写真なので映させてもらいました。奥本さんという方です。この榊原さんという筆者の方とお会いしたことはないのですが、牛窓でマキハダを売りに来る船がいるということを知って、それはどこだ、それは大崎上島だということで明石というところまでたどりついて、そこで話を聞いて最後はその原材料である檜を加工している奈良の桜井まで遡っていくという手法なのです。非常に今、新聞でも雑誌でも緻密なルポというのはなかなかない。とても面白いもので私もコピーしか持っていませんけれども、今回あらためて読ませてもらいました。

(次)

私たちは広島で「宮本常一・あるくみるきくの会」という読書会をしておりますけれども、昨年11月この島をフィールドワークさせてもらいました。宮本本人も来ているということもありまして、木江の町などを歩いて見ました。

(次)

先ほど森本さんの話にも出た大内家です。確かに四階建てのようで五階建てというふうにあとで伺いました。

(次)

先ほどのマキハダと関係ありますが、これが船釘でしょうか。槇皮（マキハダ）を作り、船釘を作り商う。そういった商いのルートがこれを持ってずっと瀬戸内海を旅といいます

か、行商していた人たちがかつていたということが分かると思います。

(次)

以上です。また後のやりとりで残りの話をさせていただきたいと思います。

コーディネーター (谷川正芳 氏)

ありがとうございました。海からみた日本というか、歩く、見る、聞くによってそこに住んでいる人の暮らしとか顔が思い浮かぶということで、いろいろなイメージを皆さん持っていたいたのではないのでしょうか。

続きまして松島先生。個人的ではあるのですが、父が大変お世話になって広島商船高専の方で、父から話を伺ったことがあります。幸いというか、今日は著書というか報告書をぜひ手元にとったのですけれども、研究論文は私の手元にはありません。そういった意味でもその研究論文というよりも、地元ならではのということで、松島先生には小さいころからのことも含めて、いろいろ私からもぜひ聞いてみたいこともあるので、時間が実はもうとっくに定刻は過ぎているのですが、皆さんよろしいですね。 (会場から拍手)

ということですみません。松島先生、地元代表でもあるということでぜひ、いいお話を聞かせていただければと思います。